

## 古典の教科の文章も「書き抜き読書ノート」に書き抜こう

開倫塾

塾長 林 明夫

1. (1)おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。
  
  - (2)今日8月3日は、足利市を含めて多くの所で花火大会が行われると思います。私は、花火大会について少し提案があります。その1つは、花火に合わせて音楽を演奏することです。花火と音楽のコラボレーションができれば、こんなに楽しいことはないと思います。例えば、イギリスのエジンバラの花火大会はオーケストラのクラシック音楽の演奏に合わせて花火を上げることで非常に有名です。
  
  - (3)また、スペインのバスク地方のサン・セバスティアンで花火大会を見たことがあります。その花火大会は1週間に渡って続きますが、1日に15分しかやりません。私が行ったときには、日本のチームが日本風の花火を15分間上げていました。とてもしみじみとした花火で、私はよかったです。やや派手さが足りなかったせいかスペイン人の間での人気はあまり高くなかったようです。やはりラテン系ですから、華々しくドンパチドンパチと上げるような花火が皆さんに好まれるのかもしれませんが、しかし、私はしつとりと打ち上げる日本の花火はいいなと思い、しみじみとしました。
  
  - (4)「花火」は固有の文化そのものです。花火大会のやり方は国によって様々であると思いますが、2時間打ち上げ続けるのもよいですが、1日に15分ずつ8日間に分けてやるのも一つの方法だと思います。これが2つ目の提案です。1つ目として音楽に合わせて花火を上げることを提案しましたが、ただむやみやたらに花火を上げて、それに関係のない音楽を大きな音量で流したのではあまりいい気持ちはしません。花火は美しいからよいですが、大きな音響の音楽はあまりいい感じはしないと思います。それを考慮した上で、固有の文化としての花火を目指して、花火大会における音楽はどうあるべきかをそろそろ考えていただければと思います。今日の夕方は足利市をはじめいろいろな街で花火大会があると思いますので、皆さんにお楽しみいただければと思います。ただ、くれぐれも天気予報を見ながら行ってください。よろしく願います。
2. (1)さて、今日の「開倫塾の時間」では、古典の読み方、学習の仕方について少しお話をしたいと思います。私の手元に、大修館書店が出している「古典 1」という高等学校の教科書があります。そこにとて素晴らしいことが書いてあります。それは、「古典の名文選を作って読もう」ということです。自分自身で古典を読んだら、気に入った文章をノートに書き抜いていく。例えば、「方丈記」の冒頭には「ゆく河の流れは絶えずして…」という非常に感銘深い文章が

あります。この「方丈記」を読んだら「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」という文をノートに書き抜く。それから、松尾芭蕉の「おくのほそ道」を読んだらその最初の文章を書いていく。いろいろな古典の文章を読んだら、冒頭の文章でもよいし、全体の中で一番気に入った文章でもよいので、それを書き抜いて自分自身の古典の名文集めたノートを作っていくといいということが、高校1年生が使う大修館書店の「古典1」という教科書に出ています。私は、これは非常によい方法だと思います。皆さんにも是非お勧めしたいと思います。

(2) 私が、皆さんにお勧めしたいのは、「書き抜き読書ノート」です。古典に限らず、いろいろな文章を読んでいて気に入った文章が一つでもあったら、それをノートに書き抜いておく。例えば、夏目漱石の作品に「それから」という小説があります。その中に「ああ動く。世の中が動く」という一文がありますので、気に入ったら「書き抜き読書ノート」に書いておく。志賀直哉の「暗夜行路」を読んで気に入った文章があったら、書き抜いておく。村上春樹などの作品も同様です。このように、自分の好きな小説やそのほかの文章を読んで気に入った一文・文章があったら、題名・作者(筆者)名・読んだ日付などを簡単に書き、その横に自分の気に入った一文・文章を書き抜いておく。この「書き抜き読書ノート」を1冊作り、繰り返し何回も何回も読み返すと素晴らしい人生になると思います。

(3) 日本の古典には、「方丈記」、「徒然草」、「今昔物語」、「竹取物語」、「伊勢物語」、「枕草子」、「平家物語」、「土佐日記」、「蜻蛉日記」、「更級日記」、「万葉集」、「古今和歌集」、松尾芭蕉・与謝蕪村・小林一茶の「俳諧」などいろいろなものがあります。それらを読んだら、今、御紹介した「書き抜き読書ノート」にたとえ一文でもよいので書き抜いておくと、とてもよい思い出になります。できれば「古典1」の教科書にあるように、その書き抜いた文章を声に出して読んでみる、「音読」をするとよいと思います。つまり、「書き抜き読書ノート」が出来上がってきたら、書き抜いた一文・文章を繰り返し繰り返し読んで、できれば暗唱できるまで、何も見ずにスラスラと言えるまでにします。これはとても面白いと思います。まずは、スラスラ読めるようにする。次に、自分で声の大きさに変化をつけたり、どのようにしたらこの文章のよさを表現できるかと息のつぎ方や間の取り方などを工夫したりするなど、短い一文・文章でもいろいろなことができますので、ぜひやっていただきたいです。

(4) また、可能であれば皆さんの前で話す機会のあるときに、このような一文・文章がよかったよとスラスラと諳そらんじていただく、何も見ないで読めるまでにするとよいと思います。それを聞いた皆さんはびっくりして、この方は素晴らしい方だと高い評価を受けることになります。また、聞いた皆さんの教養にもなります。これも自分のためにも聞いてくださる方々のためにもぜひ行っていただきたいと思います。

(5) 百人一首なども含めて、名文と言われる素晴らしい文章のたとえ一行でも暗唱し、それを相手の方に伝える。また、自分でいろいろな所に行き、そこで書き抜いた文章も繰り返し繰り返し声に出して読んで自分のものにする。これが素晴らしい読書の仕方の一つではないかと思います。

(6) たまたま私の手元に大修館書店が出している高等学校の古典の教科書「古典 1」があり、そこに古典の名文を集めたノートを作ってはどうかという御提案がありましたので、紹介させていただきました。高校の「古典」の教科書に限らず学校の教科書は、学校の教科書を取り扱う書店に御依頼すれば入手できますので御相談ください。

(7) 私は、古典に限らず、村上春樹や俵万智など好きな作家の方がいらっしゃったら、それらの方々の作品の中で気に入った文章をノートに書き抜いて「書き抜き読書ノート」を作っていたきたいと思います。そして、それらを繰り返し音読して覚え、たとえ少しでもいろいろな方の前で紹介することも、皆さんのためにも自分のためにもなる素晴らしい読書の仕方であると考えますので、ぜひ参考にさせていただきたいと思います。

(8) 今日は、固有の文化としての花火のお話と「書き抜き読書ノート」のつくり方のお話をさせていただきます。

— 2014年1月20日(月)加筆・訂正、林明夫 —